

KeepPer

キーパー進化論

～「マニアックな人」から「普通の人」のコーティングを貫く～

「マニアックな人」だけでなく、多くの「普通の人」に満足していただけるコーティングを開発し続けるアイ・タック技研(株)。ピュアキーパー、ダイヤモンドキーパーに続き、今一番人気のクリスタルキーパーの誕生は、多くの時間と人々の努力の賜物。クリスタルキーパー誕生までのエピソードを代表取締役・谷好通が語る。



episode 1 磨きとコーティングの時代

約25年前、1軒のガソリンスタンドを経営していた私は2軒目のスタンドが欲しくてその用地を買った。

しかし当時は、ガソリンスタンド数の総量規制が残っていて、どこかの店舗を潰して枠を手に入れなければ、ガソリンスタンドとして認可されなかった。しかし、その総量規制があつたと1年半で撤廃されることは分かっていたので、ガソリンスタンドの建物と設備を作ってしまう、ガソリンなどは販売せずに、まず洗車とコーティングのビジネスだけを始めた。そして、それを「クリーンベースWith」と名づけた。

しかし、普通の洗車やコーティングを売っても、あまりい



2軒目の店舗「クリーンベース With」

い立地ではないその場所にわざわざ来て買ってくれるわけがない。そこで当時、最高の技術を持っていると思われた研修に通って、最高の洗車とコーティングをお客様に提供しようと考えた。

その研修で習ったのは主にいわゆる「磨き」と呼ばれる技術で、スポンジバフを回転させるポリッシャーと、コンパウンド(研磨剤)を使って、塗装の表面を磨き、塗装の表面についている微細なヘアライン傷やツヤボケを取るものだ。

まず車を洗って泥を落とし、ワックスカスなどを丁寧に取る。それから「粗目の研磨剤」で薄く塗装の表面の傷やボケを削り取るのだが、それによって満遍なく様なボケが残る。次に「中目又は細目の研磨剤」でその様なボケを均すように磨く。最後に「極細の研磨剤」で塗装表面を極めて均一で平滑な状態にする。

その「磨き」の仕上げは、新車の塗装以上に平らでツヤがあり、鏡のような表面になるので「鏡面加工」と呼ばれていた。車好きのマニアにとってはたまらないツヤである。最後に、鏡のようにした塗装表面にポリマーコーティングを塗って完成となる。

それは、1台仕上げるのに5時間から10時間もかかる大変な作業だった。しかし、そういうマニアックな商品を買う人はごくわずかな一握りのマニアックな人であり、そのマニアックな人を集めるのに、かなり苦労を要した。

episode 2 清隆君の涙

そんな大変な作業を伴う商品をメインにした2軒目の店は、私の弟・清隆を店長にして運営したがずいぶん苦労をしたようだ。

ある日曜日、1軒目の店であるガソリンスタンドで閉店後、事務仕事をして気づいたら深夜2時になっていた。2軒目の店もとっくに閉まっているはずだが、何か予感がして2軒目

の店に電話をしてみたら弟が出た。

「こんな時間まで何やってんの」

「いや、ちょっとボケが取れなくて…」

「ふーん、こっちは終わったから、今から行くよ」

店に行ったら、弟は作業場に座り込んでいて、こっちを見て笑ったのだが、目の端っこにうっすらと筋がある。涙の跡だ。

あのころの「磨き」には不思議な現象があった。ポリッシャーで粗目から細目、極細の研磨剤で順番に磨いて最後の仕上げのツヤを出す工程で、突然うっすらとモヤがかかったように、しつこいボケが出てしまうことがある。

そうなると超微粒子の研磨剤でどんなに丁寧に磨いていっても、逆にもっとボケたりして、何をどうしたらいいのか分からなくなってしまうことがあった。

弟・清隆はそんなドツポにはまり、くたくたに疲れた肉体的なつらさも手伝って、つい、涙がポロっと出てしまったのだろう。



「磨き」の難しさに涙をポロっと流した弟・清隆

いずれにしても大変な1年半だった(私がではなく弟が?)。

やがて1年半経って、ガソリンスタンドの総量規制が撤廃され、2軒目の店の地下タンクにもガソリンや軽油が入れられ、ガソリンスタンドとしての商売も始まった。

すると、それまで1日に10台も来れば多いほうであった来店客も、ガソリンを入れて何十人ものお客様が来るようになった。お客様の中には、店自慢の特殊な「磨きとコーティング」を買ってくれる人もたくさん出てきた。しかしそこでびっくりしたのは、普通の人、マニアックな人とはまったく違う反応をしたことだ。

episode 3 普通の人、車を離れて見る

何時間もの手間をかけて仕上げた「鏡面加工とコーティング」は、新車以上に表面が平らであり鏡のようなツヤになる。

だから仕上がった車を引き渡す時、「マニアックな人」は、その表面に、顔を30cmくらいにまで近づけて、目を見開き、惚れ惚れと鏡面になった我が車を、文字通り舐めるように見て、「おーっ、スッゲー、傷ひとつないじゃん、ピカピカじゃん…」と、感動してくれる。

しかし、「普通の人」は、離れたところから車全体を見て、「おー、きれい!鏡みたいなツヤだね。自分の車じゃないみたいだ」と喜んでくれるのだが、マニアックな人のように舐めるようには見ない。

それこそ涙ぐましい努力で磨き上げた鏡面の塗装は、顔を思いっきり近づけて、いろいろな角度で見て、初めてその真価が分かるのに、だ。

最初は「素人」にはわからないだろうなどと思ったが、考え

てみればお客様とはまさしく素人であつて、プロではない。プロ、あるいは玄人はだしのマニアックな人にしか分からないような商品を、自慢げに作っている自分たちは、自己満足の世界にはまり込んでいるのではないかと。

車に乗っているほぼすべての人は「素人」「普通の人」。その多くの人達に喜んでいただき、分かっていたらいいものでなければ、私たちも、お客様も楽しくない。

「きれいになった車を離れて見る人、つまり普通の人達のために、今までの技術と知識を活かして何が出来るか」。

それがキーパーのテーマとなった。

episode 4 最初のキーパーコーティング・ピュアキーパー



3か月に1回繰り返すポリマーコーティング「ピュアキーパー」

○磨かずに塗装を守る

キーパーの初めてのコーティング商品が、ポリマーコーティングであるピュアキーパー(当時は単にキーパーコーティングと呼んでいた)だ。

ピュアキーパーは、前提として「磨かずに」独自のポリマーを手で塗る。ワックスのような感覚でポリマー被膜をコーティングしてしまうのだ。もちろん塗装に汚れがあれば、すべてすっきり落とす。塗装が荒れていれば、少し強めのポリマーで前もって「傷を埋める」作業をする。すべての作業工程で、ボディが水で濡れたまま作業するのは、水が持っている滑る性質を利用して塗装にやさしく作業するためだ。すると、ワックスとは一味違う、塗装そのものが蘇ったようなツヤが出る。ピュアキーパーの被膜も、塗装そのものも、同じくポリマーであるからだ。

○塗装の身代わりとなって、表面の部分だけを入れ替える

ピュアキーパーのポリマー被膜は塗装の上で、汚れを受け止めるが浸透はしない。汚れは被膜の上に乗っているだけ。さらに日光の紫外線や、酸性雨、空気との摩擦などの攻撃も受け、塗装の身代わりとなって傷む。その汚れと一緒に傷んだ被膜の「表面の部分だけ」を入れ替える。だから塗装を傷めず、キレイな被膜の表面ができて上がる。

キーパーでは、この独特の仕組みを持ったコーティングを「犠牲被膜」と呼び、全てのコーティングの基本とした。

○「塗装面の改善の方向性」として特許登録

また経年車の場合、2回目以降の施工によってピュアキーパーの被膜が強化されていくので、被膜表面がどんどん平らになっていき、多少傷んだ塗装でも、新車のように復活していく。この一連のプログラムは「塗装面改善の方向性」として、特許に登録されている。